

3. 大脳皮質基底核変性症を有する患者に行った歯科治療の1例

A case of dental treatment for a patient with corticobasal degeneration

○小瀬川 遼, 菊池 和子, 磯部 可奈子,
熊谷 美保, 久慈 昭慶, 森川 和政

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座
小児歯科学・障害者歯科学分野

【目的】大脳皮質基底核変性症 (Corticobasal degeneration: CBD) は筋固縮などの錐体外路徴候, 失行や認知機能障害などの大脳皮質徴候が出現する難病である。本症例患者は CBD や加齢の影響により円背やジストニア, 四肢の拘縮などが生じており通常の歯科治療を行うことが困難である。そのような患者に対して個人に合わせた体位を作り, 安全な歯科治療を行うことを目的とした。

【方法】円背や四肢の拘縮に合わせた体位とするため, ユニットに傾斜をつけ除圧マットやクッションの配置を行った。また不随意的な食いしばりもみられるため, 開口器を使用しながら歯科治療を行った。

【結果】バイタルサインの悪化など特に問題はみられず, 合計 11 回の歯科治療を行うことができた。

【考察】本症例は CBD 発症後の症状である「無動」による自力歩行不可および筋力低下に伴う円背, 「ジストニア」に起因する四肢の拘縮の所見を認めた。

そのような患者を仰臥位にすると, 身体の各部位に痛みが生じる可能性がある。さらに仰臥位にしたことにより舌根が落ち込み, 気道を閉塞し呼吸状態が悪化するおそれがある。高さ調整を行い, 患者個人に合わせた体位としたことで問題なく治療することができたと考えられた。

また, 患者は不随意的な食いしばりが強い状態であるため, 開口器を口腔内へ入れることが困難である。そのため, 下顎両側の口腔前庭に指を入れ, そのまま下の方向に力を入れて開口を促す「下顎押し下げ法」, 臼歯部へのブラッシングによる刺激を併用し, 開口量が得られたときに開口器を挿入することで安全に器具を装

着することができたと考えられた。

【結論】本症例の CBD は国内において人口 10 万人あたり 2 名程度の稀な疾患であるが, 今回のような対応は増加しつつある高齢患者や高次脳機能障害を有する患者への歯科治療にも応用できると考える。

安全な歯科治療を行うために患者の状態を把握し, 個人に合わせた対応が求められる

4. 顎関節人工関節全置換術を施行した進行性下顎頭吸収の1例

A case of progressive condylar resorption treated with a total temporomandibular joint replacement system

○川又 慎介, 川井 忠, 小野寺 慧,
角田 直子, 齋藤 勇起, 笹村 祐杜,
豊原 梨花, 池田 裕之介, 古城 慎太郎,
山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野

目的: 進行性下顎頭吸収は, 下顎頭が部分的あるいは全体的に吸収され, 下顎高径の短縮による開咬や, 下顎後退による顎顔面形態の変形をきたす疾患とされる。重篤な症例では顎関節人工関節全置換術の適応となり, 本邦では 2020 年 4 月に保険収載された。今回, 進行性下顎頭吸収を呈し, 顎関節人工関節全置換術を施行した 1 例を経験したので報告し, 顎関節人工関節全置換術の有効性について考える。

症例と経過: 患者は 35 歳女性。開口障害を主訴に 2017 年 9 月当科受診となった。顎関節症の診断により, 治療を行っていたが, 再度精査を行ったところ, 進行性下顎頭吸収を認め, 2021 年 11 月全身麻酔下に両側顎関節人工関節全置換術を施行した。術後 2 か月経過するが, 感染所見なく経過良好であり, 定期的に経過観察を行っている。

考察: 従来, 治療困難であった重篤な顎関節症疾患での大幅な顎機能の回復と顎顔面の容貌の改善に対して, 人工関節置換術が選択肢として加わった意義は大きい。だが, 海外での術後感染や人工関節の破断などの合併症の報告もある

ため、術前の綿密な準備、術式の習熟努力、厳密な感染対策などが重要と考えられる。さらに、長期経過の確認や症例数の蓄積、それら进行分析することにより、顎関節人工関節全置換術の有効性を評価していくことも重要と考えられる。

5. von Willebrand 因子活性低下を認めた歯肉出血の 1 例

A case of gingival bleeding with decreased von Willebrand factor activity

○鈴木 舟, 小松 祐子, 山谷 元気,
川井 忠, 宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野

【緒言】 von Willebrand 因子 (vW 因子) は血小板の血管損傷部への粘着を仲介し、さらに第Ⅷ凝固因子と複合体を形成することで止血機序を担う。今回われわれは、頻回な歯肉出血を認め、最終的に vW 因子活性低下が判明した症例を経験したので報告する。

【症例】 39 歳、女性。歯肉出血を主訴に附属病院救急外来を受診した。既往にインフルエンザ脳症と高血圧症がある。右側上顎臼歯部歯周炎による出血を認め、3 日間で 5 回の受診を繰り返した。その都度局所止血で対応可能であったが、頻回な再出血を認め、受診時血圧は高値であった。内科に血圧コントロールを依頼し、採血検査で vW 因子活性低下を認めたため血液内科へ対診した。5 ヶ月後、vW 因子活性は自然回復した。

【結語】 出血を主訴に受診する患者はその原因が様々であり、局所止血が可能であっても全身疾患が隠されている可能性を疑うことが重要である。

6. マウス末梢血から抗炎症性マクロファージを効率的に調製する条件の検討 ～新たな細胞治療の樹立の試み～

Establishment of efficient preparation of immunosuppressive macrophages from mouse peripheral blood for cell-based therapy

○滝沢 尚希, 客本 齊子*, 加茂 政晴*,
帖佐 直幸*, 鈴木 啓太, 中里 茉那美,
佐々木 大輔, 石崎 明*, 八重 柏隆

岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野, 岩手医科大学大学生化学講座細胞情報科学分野*

【目的】 抗炎症性 MΦ (M2-MΦ) は、抗炎症性サイトカインなどを発現し、炎症の収束に作用することが知られており、炎症性疾患に対する細胞治療への応用が有効と考えられる。我々はこれまでにマウスの骨髄の低酸素培養下において、間葉系幹細胞 (MSC) から分泌される液性因子 (M-CSF) と、MSC 上の接着因子 (ICAM-1) が、血球系マーカー陽性の骨髄由来血球細胞を増殖促進し、さらに M2-MΦ に分化誘導することを見いだした。今回我々は、M2-MΦ の大量培養法の確立を目的として、マウス末梢血から M2-MΦ を効率よく調整する条件を検討したので報告する。

【材料及び方法】 3 週齢の赤色蛍光マウスの脛骨から通法により骨髄細胞を採取し、MSC 増殖培地を用いて低酸素条件下で 2 週間培養した。2 継代培養した骨髄細胞から MSC 及び血球系細胞画分を分離し、各細胞の増殖能、分化能、ならびにフローサイトメトリー法によるマーカー発現を解析した。また、マウス顎骨後部から末梢血を採取し、MSC と末梢血の接着共培養系、非接着共培養系、末梢血を M-CSF で刺激した単独培養系それぞれの M2-MΦ マーカーの発現状況を、フローサイトメトリー法で比較検討した。

【結果及び考察】 MSC は自身の分泌する M-CSF により未分化の M2-MΦ 前駆細胞の増殖を促進させるとともに、M2-MΦ 前駆細胞との細胞間接触作用により M2-MΦ の population を増加させた。我々は最近、マウス顎骨後部の静脈から採取した末梢血に M-CSF で刺激することで MSC の存在なく末梢血単独培養で M2-MΦ を生成する条件を見出した。さらに現在では、末梢血から M2-MΦ への分化誘導を促進する因子ならびに抑制する因子を検討している。これらにより、歯周病をはじめとした炎症性疾患の細胞治療に用いるための M2-MΦ 大量調整法の確立を目指している。